

## 『園冶』とその著者

李 桓\*

Yuan-yie and Its Author

Li Huan

## 1. はじめに

『園冶』は中国の造園史におけるもっとも重要な造園書である。中国の造園に関する研究をはじめ、日中造園の比較研究にとっても、この書物は重要な位置にある。また、この書物には、既存の地理的景観の要素を壊さずに最大限に生かすという環境配慮の思想が含まれており、21世紀における新たな造園研究にとっても啓発するところが多いと考えられる。

この書物は日本で上原敬二による解説をはじめ、2, 3種類の解説書が見られるが、原文には難解な箇所が多いため、いずれも完全な翻訳に至っていないことが現状である。

本稿は『園冶』の著者、歴史的な変遷、主な内容を紹介することを目的とする。

なお、中国では庭園のことを「園林」という用語が使われるため、本稿でもこの用語を用いる。

## 2. 著者計成という人物

中国明代の造園家である計成によって著された『園冶』は、1631年(崇禎4年)に完成され、1634年(崇禎7年)に出版された。完成当時の著者は53歳である。

計成は、別名(字)無否で、1579年に(明万歴

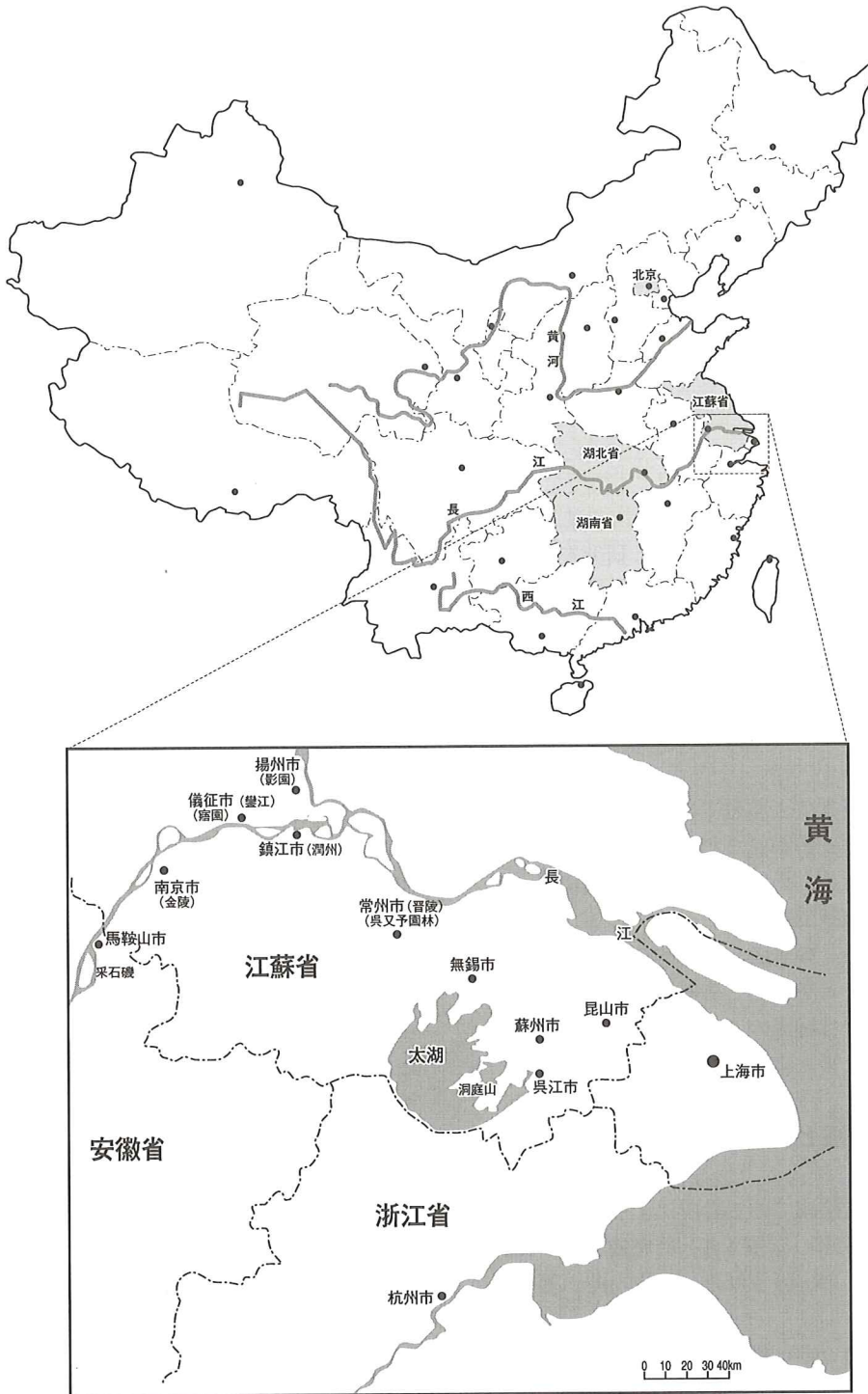
7年) 呉江<sup>(1)</sup>に生まれる。『園冶』に付されている彼の「自序」からわかるように、珍しいものを探求する性格を有する彼は、唐から五代の山水画家である荆浩<sup>(2)</sup>と関仝<sup>(3)</sup>の絵が特に好きで、よく模倣し、少年時代にすでに絵画で有名となった。北京と湖南・湖北の両省を遍歴し、中年ごろから潤州<sup>(4)</sup>に定住し、造園活動を開始した(図-1)。

造園を始めたきっかけは山水愛好家との偶然の出会いからである。「自序」が述べたように、潤州は山水が良く、山水愛好家たちが奇妙な石で假山を積む風潮がある。ある日、彼が假山を積んでいる愛好家に出会い、横で見ながらアドバイスをしてみた。彼によってできた假山は周囲から絶賛を博し、ついに彼の名が遠近に知れわたるようになった。

当時、晋陵<sup>(5)</sup>にいる呉又予<sup>ウーユウユイ</sup>という役人は彼の名声を聞き、造園を依頼した。呉は園林の出来ばえに大変満足し、「江南の景勝はただ我だけが収めた」と賞賛した。鑾江<sup>(6)</sup>にいる汪士衡<sup>ワンシーヘン</sup>という役人も彼に造園を依頼した。その園林は「寤園」と名付けられた名園で、後に計成が学者である曹元甫<sup>ツァオユエフ</sup>の<sup>(7)</sup>と出会い、『園冶』の初稿を見せた場所でもある。この2つの園林は彼の名声をさらに南北に広げるきっかけとなった。

このように、彼は精力的に造園活動をしながら、中国の造園の歴史にとって重要な意味をもつ『園冶』を完成した。完成当初、この著書は「園牧」

\* 人間環境学部 環境文化学科 助教授  
2003年11月25日受付



図一 計成が関わった地域

という題名であった。曹元甫が「寤園」を訪れたとき、案内役を勤めた計成は曹に「園牧」を読ませた。曹は、この著作はまったく「千古未聞」の「開闢」で、「牧」よりも「冶」であるべきだと助言した。すると、『園冶』という書物が誕生したのである。

辞書からわかるように、「牧」は一般に家畜の放牧という意味であるほか、「修養」という意味もある。「園牧」とは、「園林に関する修養の心得」あるいは「園林に関する教養」という意味になる。一方、「冶」とは金属を製錬・鑄造する意味である。これはまったく新しい材料をつくり出し、なき物を形あるものへ形成していくという創造の過程である。したがって、「園冶」とは、「園林の創造」あるいは「園林の開拓」という意味になる。

刊行された『園冶』には彼の「自序」のほかに、ユアングーチエン阮大鍼による「冶叙」と鄭元勳による「題詞」が付されている。阮大鍼は明代の役人で、明末清初の激動した時代に翻弄された人物であるが、中国文学の歴史において重要な位置を占める詩人でもある。阮は計成が設計した「寤園」についても、また、計成の人柄と詩画についても高く評価している。阮は「冶叙」のほかに、彼の歴史に残した名著である『詠懷堂詩』においても、計成と「寤園」を高く賞賛した詩を残している。これに関しては、橋川時雄解説の『園冶』に詳細な紹介があるため、ここでは省略する。

鄭元勳も明代の役人で歴史的に有名な文化人である。彼による「題詞」からわかるように、彼は計成と非常に深い交友関係であり、彼が所有する「影園」も計成によって計画された。「影園」は当時揚州<sup>⑥</sup>における名園の一つで、理想郷を意味する「小桃源」という別称も付与されていた。鄭はそれについて『影園自記』という書物を著しており、清代の重要な書物である『揚州画舫録』<sup>⑦</sup>にも『影園自記』の転載が見られる。

「題詞」は計成の才能についてこのように述べている。「ある手本からではなく、自らの心から山水を描き、しかも（そのイメージを）分かりやすく職人に伝え、指揮者として造園を運んだ」と。計

成は、自分の心にある詩的な世界を具体的な園林へ変えていく才能をもっていた。このようなことは、ただ紙の上に文字や絵を書く詩人や文化人がなかなかできないことで、また、規則の遵守だけを至上とする一般の職人にも当然できないことである。詩的な世界と石やレンガなどの物質でできている現実の世界の間に橋を架けないと園林が生まれにくい。計成はこの2つの世界の間を自由に行き来していたのである。「題詞」はその文の終わりにおいて、『園冶』を中国の歴史においてもっとも古くかつ重要な古典である『考工記』<sup>⑧</sup>と並べた。

### 3. 『園冶』の変遷と位置づけ

残念ながら、計成が計画した園林は現存するものはない。「影園」は復元される予定があると聞く。一方、『園冶』はその後、前文で触れた阮大鍼の政治的な波紋により、清代の200年余りの間、発禁、改名、散逸という災禍の歴史を辿り、ごく一部の人、例えば明清時代の文化人で劇作家である李漁<sup>⑨</sup>が『閑情偶寄』において言及した以外、長い間、あまり世に知られなかった。

幸いなことに、日本にその改名後の完全版が保存され、近代以来の研究が可能となった。『園冶』は日中交流の歴史の上にあったとも言える。20世紀前半における『園冶』の中国での再版については、橋川時雄解説の『園冶』という著書に詳細に記述されている。

近代以来の主な出版は、中国營造学社カンドウ闕鐸解説の1933年大連右文閣版、橋川時雄解説の1967年東京渡辺書店版、上原敬二解説の1976年加島書店版、チンゾウ陳植注釈の1988年中国建築工業出版社第2版などがある。また、杉村勇造著『中国の庭』の中でも、概要的な翻訳と解説がなされている。これらの出版は今日の研究のために大きな土台を築いている。

『園冶』の内容に関しては、「美辞麗句」に富み、直接施工につながらないというような指摘がある。筆者は、その原因は計成の造園観に由来する点に注目をしたい。鄭元勳が「題詞」の中でも指摘したように、園林には差異のみあるものの、法則性



がない。つまり、方法としてまとめられ、それに従えば造園ができるというような「型」は存在しない。『園冶』が提起した「因借」の思想が示すように、計成には具体的な場所において、既存の環境と要素を活かして、「園林」をつくり出すという考え方が根底にあるからである。歴史的に有名な詩句や絵画に描かれた世界、あるいは歴史的な名園にあるような世界を模倣しようと勧めることも本にところどころ見られるが、これは形よりも境地への追求をすすめている。詩文で表現されている多くの風景や場面は、あくまでも様々な可能性のうちの1例に過ぎず、そこで、いわゆる「主」の役割を果たす計画者が、自分の心を具体的な場所において描き出すという生成過程はなければならない。「主」の働きこそ造園の要であることは、『園冶』の言わんとするポイントである。したがって、『園冶』は設計方法や工法を主眼に述べたものよりも、理念を求めた著作である。

#### 4. 『園冶』の構成

『園冶』の原本は全3巻で構成され、造園について10章に分けて論じている。10章に先立って、総論にあたる「興造論」と「園説」の2節が付されている。

第1巻 「興造論」, 「園説」, 「一 相地」, 「二 立基」, 「三 屋宇」, 「四 装折」

第2巻 「欄杆」

第3巻 「五 門窓」, 「六 墻垣」, 「七 舗地」, 「八 掇山」, 「九 選石」, 「十 借景」

第2巻の「欄杆」は、ページ数が多いため独立した1巻となっているが、内容は「四 装折」に属し、この節のつづきとなる。

各章節は次のような内容となっている。

【興造論】 築造の観点から、造園における計画者と職人と施主との関係、及び造園の順序や原則などについて概略的に述べたものである。そこで、職人である「匠」よりも、計画者である「主」の

重要性が強調され、一般の家屋の築造において「主」は7割のウェイトを占めるのに対し、園林の築造においては、「主」は9割を占めると指摘される。また、造園計画においては、地形を利用する「因」の原理や、風景を借りる「借」の原理や、建築や空間が精緻で適切であることの大切さが述べられている。

【園説】 園林における空間構成や風景的要素について概略的に述べたものである。そこで、園林建築や、動植物の楽しみ方や、季節や昼夜を含めた時間的な風景や、建築の細部や、遊園方法と心境など、園林における方方面面について触れられている。この節で述べられた個々のポイントは、後の諸章節において、様々な展開が見られる。

【相地】 園林の敷地の基本計画について述べたものである。そこで、敷地の調査や、地形、水源、既存植物の利用の重要性が強調されている。また、敷地について「山林地」、「城市地」、「村莊地」、「郊野地」、「傍宅地」、「江湖地」の6種類の立地が分類され、それぞれの類型における計画要点が述べられている。

【立基】 園林建築と仮山の配置計画について述べたものである。主要建築から副次建築へという順序や、風景を考慮した上での配置計画の重要性などの点が触れられている。園林建築の敷地については、「庁堂基」、「楼閣基」、「門楼基」、「書房基」、「亭榭基」、「廊房基」と分類され、それらと「假山基」と併せて、各々の配置計画の要点が述べられている。

【屋宇】 園林建築の類型、設計要点、構造、設計図などについて述べたものである。建築の類型については、「門楼」、「堂」、「齋」、「室」、「房」、「館」、「楼」、「台」、「閣」、「亭」、「榭」、「軒」、「卷」、「广」、「廊」が、構造については、「五架梁」、「七架梁」、「九架梁」、「草梁」、「重椽」、「磨角」が、設計図については「地図」が挙げられている。

【装折】 装飾の部分、具体的にいうと、木造の構造と屋根が完成した後、屋根以下の空間を仕切り装飾していくための天井や板壁や扉や欄干などの

部分について、その様式や設計要点を述べたものである。「屏門」,「仰塵」(天井),「戸樞」(扉),「風窓」,と「欄杆」が挙げられている。

【門窓】ここでいう「門窓」とは、部屋についているドアと窓ではなく、園林に豊富にあるくりぬいた門と窓、或いは透かし窓のことで、一般に外壁や塀に設けられる。壁の材料はレンガや石づくりのものが多い。これらの門や窓は、ただ採光や通風や人が通るためのものではなく、風景をフレーミング・強調し、内部へ取り入れるというような役割が大きい。この章節では計31種類の門と窓の様式が挙げられている。

【墻垣】園林を囲い、あるいは園と園を仕切るための塀について、その種類やつくり方について述べたものである。具体的に、「白粉墻」,「磨磚墻」,「漏磚墻」,「乱石墻」の4種類が挙げられている。「漏磚墻」については、さらに16様式が挙げられている。

【鋪地】地面や路面の舗装の種類、様式、つくり方、適用場所などについて述べたものである。具体的には、「乱石路」,「鶯子地」,「氷裂地」,「諸磚地」の4種類が挙げられている。

【掇山】仮山の種類、構成、つくり方、配置要点などについて述べたものである。仮山の種類については、「園山」,「序山」,「樓山」,「閣山」,「書房山」,「池山」,「内室山」,「峭壁山」,「山石池」,「金魚缸」が、仮山の構成については、「峰」,「巒」,「岩」,「洞」が、仮山と関係の深い水については「澗」,「曲水」,「瀑布」が挙げられている。

【選石】仮山を築くことに用いられる石の種類、産地、特徴、形態、適応場所などについて述べたものである。具体的には、「太湖石」,「昆山石」,「宣興石」,「龍潭石」,「青龍山石」,「靈璧石」,「崑山石」,「宣石」,「湖口石」,「英石」,「散兵石」,「黄石」,「旧石」,「錦川石」,「花石綱」,「六合石子」の16種類が挙げられている。

【借景】四季の風景を通して、また、園林における隠逸的な生活を通して、豊かな借景の種類と可能性を描写的に述べた1章である。そこで、借景の種類を「遠借」,「隣借」,「仰借」,「俯借」,「応

時而借」に分類し、借景の成立にとって重要な「物情」関係、つまり外部世界と心と呼応する必要性を明らかにしている。

上における各章はただ適当に並べられたものではなく、一定の相関関係があることを見失ってはならない。「相地」から「掇山」までの各章は、造園のプロセスを示したのものである。具体的にいうと、「相地」と「立基」は敷地の調査、計画と施工に関するもので、園林の総合計画と土木に関わる仕事である。「屋宇」と「装折」は木造である家屋の計画と施工に関するもので、大工に関わる仕事である。「門窓」と「墻垣」は、レンガである外壁や塀、或いは版築や石づくりの塀の計画と施工に関するもので、左官に関わる仕事である。「鋪地」は地面の舗装の計画と施工に関するもので、左官やその他の職人（例えば原文の中でいう「鈎兒」）に関わる仕事である。「掇山」は築山の計画と施工に関するもので、石工に関わる仕事である。これらは造園を進めていくときの前後順序を示したものである。

他の章節、例えば最初の「興造論」と「園説」、最後の「選石」と「借景」は、園林の計画に関する重要な素養と知識である。

#### 注

- (1) 呉江：現江蘇省呉江市。蘇州市の南にある。
- (2) 荊浩：別名浩然，自称洪谷子，唐代末期に生まれ、五代に死去。山水画を長じて、中国の山水画の歴史に極めて重要な位置を占めている。
- (3) 関仝：別名種または童，五代初期に生まれる。荊浩の弟子であるが、その晩年の作品は師を抜き出る力があるといわれる。荊浩と一緒に「荊関」と呼ばれ、山水画の歴史に極めて重要な位置を占めている。
- (4) 潤州：現江蘇省鎮江市。
- (5) 晋陵：現江蘇省常州市。
- (6) 鑿江：現江蘇省儀徵市。
- (7) 曹元甫：明代の学者である。著作に『博望山人藁』,『辰文閣』,『青在堂』,『携謝閣』などがある。
- (8) 揚州：現江蘇省揚州市。

- (9) 『揚州画舫録』：清代李斗による著書である。揚州に住む著者は30年間をかけて、自分の目で見、自分の耳で聞いたものやことを記録した書物である。都市、運河、工芸、商業、造園、古跡、風習、演劇など多方面に触れており、当時の揚州地方の都市と社会の研究にとって重要な資料になる。
- (10) 『考工記』：中国先秦時代に著された書物である。各種の製造技術について書かれたもので、古代中国の技術を研究するための最も重要な文献である。
- (11) 李漁：別名笠翁、清代の演劇理論家、劇作家、小説家である。多くの著作があるが、その一つの『閑情偶寄』は音楽、演劇、居住、室内、飲食、植栽、摂生などについて自分の哲学を述べたもので、諸分野において重要な参考書となっている。

#### 参考文献

- (1) 陳植：園冶注釈，中国建築工業出版社第2版（1988）
- (2) 周維權：中国古典園林史，中国清華大学出版社（1990）
- (3) 劉敦楨：中国古代建築史，中国建築工業出版社（1984）
- (4) 橋川時雄：園冶，東京渡辺書店（1967）
- (5) 杉村勇造：中国の庭，求龍堂（昭和41年）
- (6) 上原敬二：解説園冶，加島書店（1976）
- (7) 李桓：中国の園林における借景の意味と「風景窓」の役割，長崎総合科学大学紀要第43巻第2号（2003, 3）
- (8) 商務印書館編集部：辞源，商務印書館（1995）
- (9) 辞海編集委員会：辞海，上海辞書出版社（1989）